

# 心染有情染 心淨有情淨

櫻 部 建

パーリ阿含、相应部第二十二相应第一〇〇经 (S III 10) の後半は、名高い「心雑染故有情雑染、心清淨故有情清淨」の句を含む。

比丘らよ、このゆえにしばしばおのれの心を觀察せねばならぬ——この心は長夜に食欲により憎悪により愚昧によってよごされている、と。比丘らよ、心のよごれによって有情はよごれ、心のきよまりによって有情はきよめる (cittasamkilesā sattā samkhiṭṭhanti, cittavodānā sattā visujjhanti)。比丘らよ、チャラナという画 (caraṇam nāma citram) を見たことがあるか。

師よ、あります。

比丘らよ、あのチャラナという画は心の思いに外ならぬ (citteneva cintitam)。比丘らよ。心はまことにあのチャラナ画よりなお多様 (citta-tara) である。

この一節は、兵藤論文(以下、二一ページ)にいう citta < citra という釈義の源と見得るであろう。

「心雑染故有情雑染……」の句は、重説の多いニカーヤの中で、ただ、この一箇処にしか見出されないものであるが、多くの佛教者の心に深く触れるものであったに相違ない。それはやがて大毘婆沙論(卷一四二、大正二七、七三一b)や顯宗論(卷五、大正二九、七九五b)に意根の増上力を示す教証として引かれ、維摩經(大正一四、五四一b、五六三b)

には維摩詰が優波離に罪性の体の無を説く教証として引かれる (É. Lamotte : L'Enseignement de Vimalakīrti, pp. 52, 53, 174)。

成唯識論 (卷四、新導本一五四ページ) は阿頼耶識の存在を証するためにこの経句を引いて「謂染淨法、以心為本、因心而生、依心住故、心受彼熏、持彼種故」という。松田論文 (以下、四〇ページ) にいう阿毘達磨集論および集論釈の十二緣起支解積はすなわちその線に沿っている。

この経句は、また、究竟一乘宝性論 (Johnston ed. p. 67, 大正三一、八三七b) では、無始以來心にとって雜染法は客來のものであり、清淨法は俱起してあい離れないものであることを語る教証として挙げられているから、右の成唯識論における引用と考え合わせれば、それは織田論文 (以下、四ページ) に論ぜられるところの阿梨耶識と如来藏とを一つに視ようとする智儼の解釈を先取していることになる。

これは決して偶然の成した一例ではない。大乘の論師らにとっても、阿含はまさしく教証 (āgama) であった。因みに、もう一つそのような例を挙げるとすれば、右の経句に劣らず有名であり右の経句と時にはあい伴って引かれたりもするものに「心性本淨、客塵煩惱」の句がある。これはパーリ阿含では増支部 I 5 (A. 10) に見える。

比丘らよ、この心は光り輝くものであり、それが、外來のもろもろのけがれ (upakkāsa, 「隨煩惱」) によってけがされている。比丘らよ、この心は光り輝くものであり、それが外來のもろもろのけがれを離れている。

異部宗輪論に説く大衆部系の「本宗同義」の中に同趣旨の句が現われる (寺本・平松本、三四ページ) ことはよく知られているが、そのほか唯識・如来藏思想系の諸経論にきわめてしばしばこれは見出される。中でも、まさしく経藏からの引用と思われるのは、究竟一乘宝性論 (Johnston ed. p. 45, 大正三一、八三三a b) に

tata ucyate : prakṛti-prahāsavarāṃ cittam āgantukair upakṣēsair upakīṣyata iti (故經中説言、自性清淨心、客塵煩惱)

とあるもので、パーリ文とは字句が一致しないが、別の所伝による阿含の文であることは間違いないと思われる。

説一切有部がこの説を認めなかったのも周知のことであるが、その考え方を最も鮮明に示しているのは順正理論（卷七二、大正二九、七三三a b）で、

聖教亦説、心本性淨、有時客塵煩惱所染。此不応理。刹那滅法、如器垢除、不応理故。……所引至教(esaṃ)与理相違、故応此文定非眞説……応知、此経違正理故、非了義説

と、諸法刹那滅を説く立場から、断乎それを退けるのである。

この二つの経句が時にあい伴って用いられることがあるのは、先に記したとおりである。現に、第一の経句 (citta-samīketā……) を引用した宝性論の上掲の箇処は、勒那摩提の漢文訳では「依自虚、妄染心衆生染、依自性、清淨心衆生淨」と訳されていて、第二の経句 (Prakṛti-pradhānāraṇa……) の意趣がその訳文の上に投影されていることは明らかである。このような受けとり方は、遠く日本の佛教者の理解の上にも現われている。親鸞『正像末法和讃』の巻末に附せられる「愚禿悲嘆述懐」には

罪業モトヨリカタチナシ 妄想顛倒ノナセルナリ

心性モトヨリキヨケレト コノ世ハマコトノヒトソナキ (親鸞聖人全集 和讃篇 二二五ページ)

とある。それはまた「別和讃」と呼ばれているものの中で

罪業モトヨリ所有ナシ 妄想顛倒ヨリオコル

心性ミナモトキヨケレハ 衆生スナワチ佛ナリ (同右 二七九ページ)

という形でも見えている。これを親鸞作と認め得るかどうかは実は問題のあるところであるが、それはいずれにしても、上記の維摩経に見えた第一の経句の受容と、如来藏思想に立つ第二の経句の受容とが、一つになった理解をそこに見出す、と言つて不当ではないであらう。